2006：146 頁）ためとしている。確かに決まっていればタイプ a，c，e となり，決まっていなければタイプ d となるというように分類されるため，単位数があらかじめ決まっていたかどうかを決定していることになる。それが恣意的ではないかとの指摘と考えるが，土器自体の文様構造をあわせ見ていることによって，ある程度は推測できるものと考えている。加曽利 E1 式や阿玉台式の 4 単位の波状口縁やその間に区画を配する 8 区画の文様割付と，波状や U 字形の磨り消し縄紋区画を横位に連結させていく加曽利 E3・4 式期の集積型の文様割付が結果的に 8 単位になったものとは，明らかに異なっていると考える。小林の説明が不十分であったことは認めるし，分類の中で微妙な位置づけの土器の実例が生じることは認めるが，土器文様の実態を摘出して分析する上では，改訂の余地はあるとしても小林の割付タイプの分類の方向性は，有効性を持つことを主張しておきたい。次に，桜井は，「文様の割付は存在したか」（桜井 2006：147 頁）という問いを投げかけ，特に小林の想定である「割付具」としての「トンボ状器具」や「縄」の存在に否定的な見解を示している。割付が縄紋人の認識に存在したかどうかは，「割付」の範囲をどの程度に捉えるかという定義の問題にもよろうが，少なくとも 4・6・8 単位や 3 単位など定型的な区画数が採用される土器型式においては，文様を描出する際に計画性があり，土器器面に何らかの予定を当て込む場合は割付が存在したと捉えられる。問題は，我々が考古学的にそれを認めることができる証拠があるかどうかであろう。その点については，土器器面上の文様以外の印のある例を小林は提示したが，文様に取り込まれている例や印を付けた後に消している例もあろうから，それほど多く残っていないこともあり得ると考えられる。少数例とはいえ，今後類例が増えることを期待している。割付具の存在については，桜井により割付具の存在した確実な証拠はないとされるが，小林の挙げた割付タイプ d における等間隔の文様間隔の事例などについて，もしも割付タイプ d の文様単位間に不均等な間隔の事例が卓越していたり，割付

タイプ a1 とした事例にかなり不正確な事例が多いと論証されるならともかく，特段に割付具の存在を否定する論拠もないようである。一方で，桜井の指摘のように，確かに低湿地遺跡などでのトンボ状の器具などの出土例はない。小林の持論を証明して行くに当たって，割付具自体が出土すればもっともよいかもしれないが，状況証拠として特に割付 a1 タイプなどの角度がどのくらい正確かを検討していくことによって，より議論しやすくなるものと考えている。いずれにせよ，桜井による批判を受け止め，議論を積み重ねると共に，考古学的なデータを積み上げていきたい。小林のおこなっていることは，たとえ割付タイプが桜井の云うように適切ではないということになったとしても，測定データは基本的に生きると考えられるからである。

本稿を草するにあたり，かながわ考古学財団および，天野賢一・長岡史起・小川岳人・阿部巧嗣・小林尚子・西本志保子各位のご協力を得た。期して謝意を表します。

参考文献・図版引用文献

天野賢一 2000『かながわ考古学財団調査報告第 79 冊　原東遺跡』かながわ考古学財団。

天野賢一 2002『かながわ考古学財団調査報告第 133 冊　川尻中村遺跡』かながわ考古学財団。

大塚達朗 2000『縄紋土器研究の新展開』同成社。

小川岳人・三瓶裕司 2002『かながわ考古学財団調査報告第 129 冊　南原遺跡』かながわ考古学財団。

黒尾和久・小林謙一・中山真治 1995「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」『シンポジウム縄文中期集落研究の新地平（発表要旨・資料）』縄文中期集落研究グループ・宇津木台地区考古学研究会。

小林謙一 1991「縄文時代前期末葉から中期にかけての三矢田遺跡」『真光寺広袴遺跡群　Ⅵ　三矢田遺跡　遺物編』鶴川第二地区遺跡調査会。

小林謙一 1993「縄文中期分析のための基礎的データ整理」『湘南藤沢キャンパス内遺跡　第 1 巻　総論』慶應義塾。

小林謙一 1999「縄紋中期土器器面の文様割付について」『セツルメント研究』1 号。

小林謙一 2000「縄紋中期土器器面の文様割付について（続）」『セツルメント研究』2 号。
小林謙一 2000「縄紋中期土器の文様割付の研究」『日本考古学』10 号。
小林謙一 2002「南西関東地方縄紋中期後半の文様割付の研究」『縄文時代』13 号。
小林謙一 2002「勝沼町宮之上遺跡 6 号住居跡出土の中期前葉土器について（その 2）」『山梨県考古学協会誌』第 13 号　山梨県考古学協会。
小林謙一 2002「縄紋中期土器の文様割付」『土器から探る縄文社会　2002 年度研究集会資料集』山梨県考古学協会。
小林謙一 2014「円筒土器文化における文様割付の研究」『特別史跡三内丸山遺跡年報』17，青森県教育委員会。
桜井準也 1998「縄文土器製作における文様区画と施文過程―縄文人の認知構造の解明にむけて―」『東邦考古』22 号。
桜井準也 2006「土器の文様区画と認知構造―文様の割付と「うつわ」の認知の問題をめぐって―」『心と形の考古学―認知考古学の冒険―』同成社。
桜井準也 2006「文様の割り付け」『土器を読み取る　縄文土器の情報』縄文時代の考古学 7，同成社。
白石浩之・山本暉久 1977『神奈川県埋蔵文化財調査報告 12　当麻遺跡・上依知遺跡』神奈川県教育委員会。
鈴木公雄 1968「安行式土器における文様単位と割りつけ」『日本考古学協会昭和 43 年度大会研究発表要旨』。
中山真治・宇佐美哲也・武川夏樹・黒尾和久 2004「東京編年表（「東京①・②」）とその解説」『シンポジウム縄文集落研究の新地平 3―勝坂から曽利へ―（発表要旨）』縄文集落研究グループ・セツルメント研究会。
長岡史起 2002『かながわ考古学財団調査報告第 132 冊　原口遺跡』かながわ考古学財団。